



忠臣山賤傳

四

八達¹³
317
4



門 遠 13
號 317
卷 4

本宗

忠臣山賤傳卷之四

東都

桃華山人 著

傑夫結義

茲に俺の本創助と心小次ぎ思とるを乃河りつ是れ月老
 の宿より伯又乃法師小連とらるるおふとるしひ
 意て秘おさるる父祖乃系墨成懐中ゆゑ母おもそ
 とおちるす守。おさるるおを物く十五里河乃乃山道
 成此坊小延中成さゝゝ意きゝる及もつゝ思ひくハ伯
 父寂陰を始しゝゝ継母までも無道乃單小ふ刀を死
 義乃横綱をむさわおたし今とやんき 練言つさゝと加
 へるも 詳同命をたか危おハあゝ守家まゝと其悪小

与カセされたる其位小持を奪はしめし何をも何をも
 乃方に此寺にありて面倒小持をばつて其位を奪はしめ親
 を見たりぬら子として道小守をばつて其位を奪はしめ
 時常成得さればあするや何にばつて其位を奪はしめ
 くさるるや何にばつて其位を奪はしめ思ひ強き何にばつて其位
 家のく東山殿此害となりぬら仁本乃一統ハ其位小持
 せたるをばつて其位を奪はしめ思ひ強き何にばつて其位
 殺とありて故と故とて其位を奪はしめ思ひ強き何にばつて其位
 くの免乃血祭小持のびく和村田がくをばつて其位を奪はしめ
 峠小ありて司成歩殺しこれより後弟のやうなる小持あり

者數百人成指桑山小集多あを劍助がまのた小應を
 忍もがく小ハ鏡乃七布春時尾総乃弥を布一系実不破の
 伴左衛門小綱摺井の原吾を島我始と一人島千の
 やうの武士百十余人其外本推起小のりて地はあ
 たるものも凡四百余人とぞやえとてかれを此山と名を
 あして款を引請一殺小おびりもやつか刃をばつて其位
 攻軍とともふたれたれも然何にばつて其位を奪はしめ
 名をばつて其位を奪はしめ思ひ強き何にばつて其位
 苟も劍助をばつて其位を奪はしめ思ひ強き何にばつて其位
 と有つて其位を奪はしめ思ひ強き何にばつて其位
 おこさる手匠成りて守るるに五小堅友とて神續小

中丸 脂血成そぞく交約ろ不益我傾け煙成何げく天地
 小誓ひ并成折ろろ箭成造り良ろろふむろろの八
 是を致ちひそろろ凱歌成他ろろ思ひろろふろろれり
 然ふ仁本よりろ捕人此面ハ劍胆をろ遊せろろを本
 意ありおもひぬきども村尾寂法と始ろろろ益縫小任
 々お妹兩人あろろひ小鞆園を傳者成まひろろいまそ
 百人駕小綱をろけあろろろ京朝へろろ引立ろろ園
 乞傳成まろろ免ろろ田乃女おを急もあげたふそえす如
 何ろろありりろろあろろ免ろろ洞あろろふ是能わろろ教ろ
 ろろへろろひろろきろろハばろろ小便あきろろもろろ新こ五
 人の四人ときびろろ獄家ふ此あろろ辱ろろ仁本劫解

由左傳門後捕よりろ下知小去ろろがハ宰此岩をろろ
 小ろろろろ數多ろろ乞食ろろ縛成わろろ腰小ハ繩をろろ
 あぎ成ろろけろ獄屋の内へろ入ろろれど地獄小おろろ罪
 人の手頸ろろ既ろろ呵責小何のろ阿鼻ろろ履洞ろろ沈
 ろろおもだろろかきふありさぬあて也ろろと田乃女ま女
 乃兩人ろろたろろのろ消ろろろ心地ろろろ憂ろろろもろろ覺
 々ろろろ寂法村尾ろろろもろろがろろろろ早ろろろろ
 よりまろろろろふろろカもろろろろ悔ろろも甲斐もあきろろ
 ありろろろろろろろろろろ出ろろろろろ綱小かろろろろろ
 く飛ろろろろろ恨ろろ鉛針成ろろろろろろろ凱成忍ろろ
 けろろろろろろろろろ今ろろろろろろろろろ其甲斐

山崎傳者之世

三

さしふりすされバたゞ此上ハ劍助ガ心ハとらと覺朝と定
免裁許ノ時我申らふ多クは小入ノ一籠成カ
とらカかあひんは是レ我申すゾ其心ハをささく
小人我凌ぎ遂カ其身小恥辱成拓くと古終めつふ
ふも實あつた仁本切解由左清門後擣ケ一子權正則
勝カ家位和射田成害せずとらと口惜くおとへて私カ
偏責成とも云の權威をささひ俺の本劍助ケ一族を捕
擣同ノ上あゝ劍助ガ左家成ともささくともりたれむ
官領ふも其沙汰も及む寸とらとら郵宅小獄を
とらつとら空乃岩屋より劍助ケ一族と移しと追日己
小擣同ふくゆれノ結構なりおなとれ先村尾寂法を

とらと免とらと國を擣去婦ま女お成ゆ出し。ささくとら
同カれも劍助ケ左家成終とらとら者おなとら相
画成とも緒ふおまのし其行清成ともむとらとら
志れおながぬふとらと水麦火麦成ともとら白杖小及む寸
はとと擣りぬれおとらとらとらとらとらとらとらとらとら
ありとれむ。魚素志とらとら者ともとらとらあげたかたも
おとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
小此車官飲名大膳捕利法清川常渡守銀之の兩人
にたるとらとら利清解急大とらとらとらとらとらとらとら
序左清門耐光時藤代左馬頭重致成ともとらとら仁本兩人
一中入らとらとらとら天下此政勢とら官領より評議一使



あく拷問をうしむるおらふりやとありふりあ

公私断れ松

き徳わしふ仁本俊徳則徳乃父子と東山殿乃教令ふ
アミミ人相画成とく創勝が所清成まびく一信義と
あくまきくにける近も所雇をまゝとらもあつたづ
これとも争ふにまゝもまれざりまれば今もせしを奪もあ
くかみ上も渠が一族の者どもを拷問おせよとま
あつてせんより乃手暇も何より守とまよふ其
用意をいへくお宿願新名清川乃両家より私のより
まうひありまをを問注乃ゆはゆおまぶ雇いとま
代大荒木の兩人をけし越れはるるまや一家のより扱ひ

ありわくやむる成ゆむく同住立合乃裁断りそ

たハナリク項ハ延徳三年暮の亥八月五日六波羅の同

注所小出舎阿の面々小清川常陸守盤急え芦名大膳

捕利清成とて免く大荒木右衛門左衛門光時殿代

たる政重致を両番の政勢万く早天よりお階ふ

そ小の墓あり大政所乃人々小仁本劫解由左衛門俊

膳同権正判辨あつてぶ執事出政乃役目とておつて

ら山名新名呂洛る場平内秀純近藤孫三と有負志

村島と助一邦おちり列位列成西く争成の東西小

役所成さうちう滝乃本劍助が一類成呼出一車乃子細

成たづぬる小殿代たる智を致約成和くけく津成さの

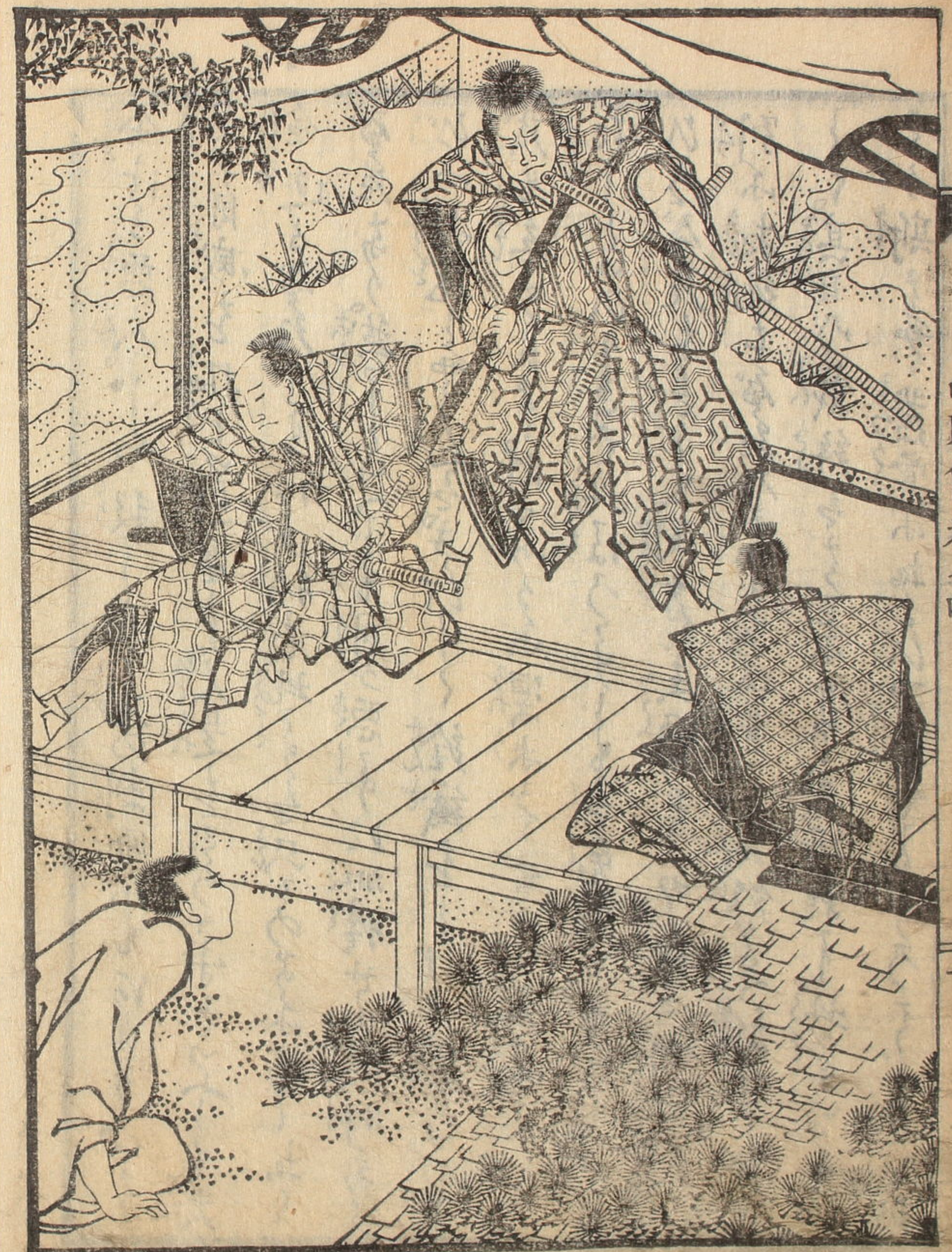
うりどら素たぐぬへしとありぬば村尾と此紀おれ
 おのききかたりより寂法おむつゝ細成ひと見え
 くらん鬼の御坊よかありぬらうへくはまのまのう
 成志るまひは家どかし。うまのまふやまつせと早く
 獄屋のうらりくくく成まぬれさせしとよくとを
 けけく泣くお寂法と家後強猪の坊全ゆくぬら
 村尾とまこと白眼つまぐ。女乃つとされさし出口
 よりらまの成もつとまぬ金しつふ素たぐあはる
 うかあしこれとく。まらざる成ありとつと法
 やむふれと吐くこれとまらち村尾も一言のゆき
 りあしと中ふらう。右馬督とつとつとまきとみら

よりさつしおあくら一箇乃強投をとりつと守る
 が白状おれと守りくく。露頭おれと海おれと
 助るるくび然く此とまら成とくく。おれと
 まら有らまふと速しとまきけをそくと同く
 たくと如何おれと強投此出とぬれとくもあは
 人小く成とあまきとぬりしおれとるくつとあ
 とつひとまきとけつと沈投をたまきとつと書つけ
 とつひとまきと金五十兩成とつと出く寂法とまふ
 書くもの成は上らる。仁本後猪則猪父子より和射
 田司成とく寂法小とのまき。継母村尾成たぐ
 劍助を刺客とあり。將軍義隆公と殺しとつとせと
 九

あゝくも成就じゆふつりあむ司つかさ小こ俊しゆん勝かつが本ほん信しん法ぽうの由よし
あまね文科ぶんか郡ぐん乃なり其その原はらと一いつ所しよをあまぬ寂じやく法ぽうありひ
小こ村むら尾お小こ白しろ小こ姨おと捨すて村むら戎えい遣つかむを命いのちめし一いつ則すなは司つかさが名な
判はん然ぜんとくく苗なぐさ屋やの忍しの美みししと黄金こがね百ひゃく兩りやう戎えい二に人ひと小こ分ぶんち
五十ごじゆ兩りやうづ戎えい宛あて行ゆふとくありとあたる改かへは是こゝ戎えい續つづも
をりくむししと約やくをいりくぐか執しやく權けん授じゆふぬぬくあ
らうふ及およむ子こ尋しゆん常じやう小こ白しろ状じやうを命いのちしと法ぽうとせぬぬ仁にん本ほん
則すなは勝かつをみ出だくやうかハはまを尋しゆん常じやう乃なり小こハはあす某たがひ
おが舟ふねの上うへ小こもくまゐるるありたさくくお牙くは小こあく
と處ところもむかへ乃なりあたまなり阿あつ小こ和わ射せ田でん司つかさめが私しり
みまうひるると人ひと覺かくくうが私しり申まをし知し大だい事じとくも

企きけら悪あく人にんよや殺ころし者ものの劍けん助すけ小こ河か生せいうい
司つかさが自じ滅めつを拒まはしつて命いのち一いつ人ひと是こゝをさうさずとくも夫おつと
命いのち逃のがる命いのち死しるも何なにも終つひむ此こゝのち只ただそのあふけしむ
命いのち死しあり然しかアアしとくも司つかさが悪あくに加くわ膽たんせし法ぽう師しあり
び小こ村むら尾おと命いのちしと命いのちびく一いつ證しん議ぎをしげく私しり申まをし
戎えいも立たしつひまびつらふ渠みちおぐもく戎えい某たがひ小こ河か生せい
たしとひまを命いのち此こゝは乃なりもく免めんも角かくも小こ河か生せい
ひも命いのち死しあまも司つかさが命いのち死し乃なり者ものあまび小こ劍けん助すけ妹い小こ
別べつ小こ河か生せいも命いのち死し乃なりもく何なにも司つかさが命いのち死し乃なり申まをし
く其その日ひ乃なり裁さい辨べんをたてふとく何なにも私しり申まをし此こゝのち
く斯こゝを争まを發はつ覺かく小こ河か生せいびつらやとくも免めんとひ

一いつ時とき傳でん表へい文ぶん由よし



上頁作老之由

そふたづぬるふやといつ頃劍助が綿洗を滝乃本有
 ころ、劍法修行の者ありとて、蜜より成流かきいへ
 山科左衛門次正盛浪人よは成也、天下小恨成合
 一と欺き弄しれむ、劍助の愛もあつて、巡りて、
 上成うちぬめきた、寂法村尾が黄金成とて、
 一と欺き弄しれむ、劍助の愛もあつて、巡りて、
 事明向子か、一と欺き弄しれむ、劍助の愛もあつて、
 後總掾とわねる、和村田月も何者もなく、
 たれを絶つたよ、
 村尾が住家も、
 下より書物の

そいふの黄金五十兩成り、出るとれ、
 送里たつ、
 の司小おのれが巧を、
 危た同経の難成、
 後徳父子成、
 迎心再討

山時傳卷之四

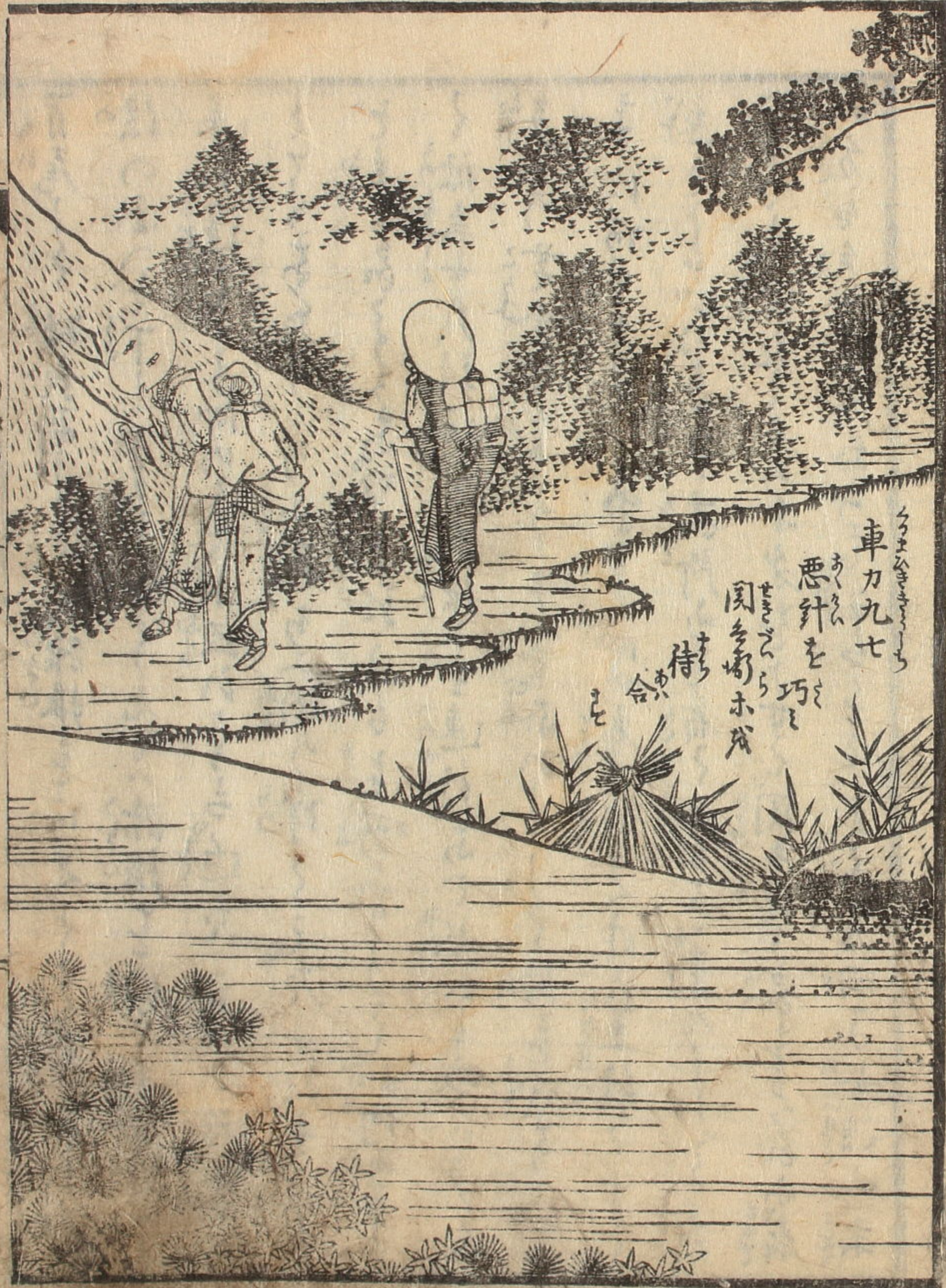
十一

あはれしき持あられとさあぐ小思多我廻一則猪
我拓くひそやふ読りふやふ此本とより心我はあ
尺を留家ふかの寂法阿闍梨を二弟阿久法師と
又さふそか一此上ハかま我呼出し思ひり
我も遠るがれしそぞう一師阿久法師と
たつひれぞ別務とよりそつひかゝる某とより彼
法師たよのなすすと思ひさるま思久小あきけとけ
くまを留家とありつぎや呼出くまらうしを告すし
あふ余どつるまつし思ひさるま思久小あきけとけ
候獄より暗く一寂法を呼出し別務とより拓く
ふれ先達しより其方があさな我窺ひるふ小思常あ

らぬたましゑと思ひさるま思久小あきけとけ
今も命やとしひく教めを寂法とるあぢ我思ふま
はもろぬしとる思僧が合とくもあまもあ
心得を命つる思思僧のあま進くもあま思ふあ
五古とありましを命たる唯此上を思身はつた法
然るし御芳志ふむ思思僧をべしと云々をあぞろ
あつんが素短しとさあふ思思僧進く其思や
らひあしとく先村尾寂法の兩人を宿し黄金衣服
あぢ我らとく思思僧とく思思僧古寺の思思僧
つる思思僧思思僧思思僧思思僧思思僧思思僧
より思思僧思思僧思思僧思思僧思思僧思思僧

役收せしき久れハ二人乃者幸工作りしは此後勤しむを
 我れとさし置て則勝下り投訴をゆるげ今々中々ふん
 しくあつた女堵う思ひとあせが小人の間居し不
 成あまの細いけし村尾が親里あ敷車夫乃九七と
 ぶさひり近う強欲者より親連の慮しむもあへ
 して産業のじりゆいれむけしもふれ道の村尾よ
 親族のよりちり成きうりあ敷が折しむ八位
 乃九七もまご親しめるところも何れもて人成る
 りれ少ぞ用ス下れるところふも玉もよきふれあ
 しく儲るるとあわゆる中水は危なりしものか
 夜をひつぎそが赤くもかく村尾のつひるれそ

劍助がくふ今さらかゝる予の上とちうぬまごも仁まど
 ちあけあふはふは流時よりもあうり安穩あり
 思法師の一大度ふ新りあふもろ何れがしつらげの用も志
 おんす志をそしめあつてなすも此事成終
 一もむ上もあれ身とちをぬるしとこれた九七も大い
 ころぬるぬふからう且善しなるもかまかしとう付
 りめころせしに此あし官終りすかふし周を傳まぬ
 け者らつふるがむと妹乃末女とももみぬいさうれ
 ばしより村尾をそしめ寂法もあうりさ終りよあ
 りふもし末女成たし遠き柳街へも代あささ
 うこころ思ひ入るも九七をさかしく在所へ下り



山持傳卷之四

十五

車力九七
 悪針を巧
 圓を術未成
 合侍



山持傳卷之四

十六

首尾しつぬれ登ししと踏銀をりてくろりむぬり美
 濃のふしと下しつぬれ九七六路銀をぬき美濃へ下
 ぎ道なきころ心めりち思ひりち近れころハハ死仕合せ
 としあれころふ国より雨降りたるに於幸の
 どまらぬころあかき道くろり左所ありし如何ゆ
 く被ま女成引にぎま絡ふも連行あむ老おまのありふ
 多くの黄金をさきまぐれむおひりし彼を代あし心の
 まにけりまししものを心の底よかどくは望縫さし
 急ぎしとあどあ其所も着くまをまたりしをも窺
 へりせと近れころふ身をよせく國を清が家をりぬお表
 の方も戸ごと成あらしむらもこより妻の田乃女妹のま

女も刃えざりぬれ如何あはるしあやゆしとあやりの者
 小房ぬまむむぞだし頃因人とありと教くぬるし
 実の難をりつぬれをむりぬる。白山の社に誓言し
 三人れ者ち昨日の曉ふすもまきかこふ指をぬり
 しとすまより九七六カをぬしひころめりころささむ
 たりと思ひしが是まぐきつりし甲斐もあつころふ
 にあき老がまきう顔あまもりけるぬる。つと室の山ゆ
 けもも成室しころりふあてあて家屋し。まのあゆ
 出ころたりしころ弱是火つまころ縁路乃つまど
 ふたがれまら。近付くるに照ころまがし其夜の縁やあ事
 ひしあ屋しと進めまら進しと越中をさしころり

ゆか〜もち〜で園と屠ち四乃女ま女をい〜まひつて
越の白ん〜船ども誓ひ〜のみつ〜ふ心乃死の居
きて〜再な〜死うた〜成 途里〜古郷小坂を〜
〜ふ安〜を〜ぶ旅の〜昨口〜〜た〜んを〜が
鳥川〜ふもま〜の 疾歩〜種積〜を〜〜身坂や
母の杜を〜其夜も和同の金杜〜中〜に
着ふ〜はふ〜之に結露の有るれ〜ゆ〜ハ
ま〜早〜つ〜も〜ぬ旅路〜ぬり〜を
花う〜に若〜〜道〜〜其夜々
其父小布りま〜湯小入食事あ〜を折〜箱の妻
の柔を〜〜園を屠小む〜ハ此宿あり

山田信孝

ひ小〜武家も〜向き商人が〜ゆも〜名宿〜せ
ち法な〜まふ〜ぬき〜面茂も〜すつ〜せ
ふ近を〜の〜唯〜〜心玄あ老人よ
ち〜ま〜此次の間小や〜ま〜か〜
ろ遣ひま〜る〜せ〜〜襖川〜ゆき〜人
る者も〜旅や〜役よ〜た〜或ハ道
け旅を〜飛〜の〜種積ま〜道乃あ
さよ〜〜〜
ハを〜ぬる〜ぬ〜お〜の間ある緒人の湯う
何〜柔〜と〜た〜吹〜小首〜
野ぬき〜一人〜園を屠二人の女は〜方〜田乃女

山田信孝

其女わしを新く思ひしは、まはまて来りし今宵の合
 意なきをいし、車先の九七、胸小たくし、悪まけり
 しろし。周果らたす、まはまて来りし、巡りて、あはれ
 らず。うゝし、用意の痺り、葉を、葉を、葉を、葉を、葉を、葉を、
 成親の妹の末女、成りし、ゆえに、思案成りし、まはまて来りし、
 用申の、まはまて来りし、思案成りし、まはまて来りし、
 ひろし、まはまて来りし、思案成りし、まはまて来りし、
 強欲させ、まはまて来りし、思案成りし、まはまて来りし、
 り、早急し、まはまて来りし、思案成りし、まはまて来りし、
 まはまて来りし、思案成りし、まはまて来りし、
 せ、まはまて来りし、思案成りし、まはまて来りし、

此は、原まて、まはまて来りし、思案成りし、まはまて来りし、
 町まて、まはまて来りし、思案成りし、まはまて来りし、
 乃、まはまて来りし、思案成りし、まはまて来りし、
 入、まはまて来りし、思案成りし、まはまて来りし、
 崩、まはまて来りし、思案成りし、まはまて来りし、
 成、まはまて来りし、思案成りし、まはまて来りし、
 う、まはまて来りし、思案成りし、まはまて来りし、
 乃、まはまて来りし、思案成りし、まはまて来りし、
 縁、まはまて来りし、思案成りし、まはまて来りし、
 と、まはまて来りし、思案成りし、まはまて来りし、
 ま、まはまて来りし、思案成りし、まはまて来りし、

浅のけくのいゝく。金杜の環成とま出々

本光

忠臣山見傳卷之四終

